

魅力溢れる芸術家

夢叶え週刊新潮の表紙描く

安曇野に大阪から移り住んで12年目の成瀬正博さんは、週刊新潮の表紙を描いている画家だ。絵を描くことは小さい頃から好きで、絵の技術は独自で身につけた。本格的に絵を



松川の自然に魅了されて移り住んだという成瀬さん。

描き始めたのは90年代半ば。この頃から週刊新潮の表紙絵を描きたいと思っていたが、画集の作成や個展の開催をしていた。描き始めて5、6年たった頃、夢だった週刊新潮の表紙絵の仕事が来た。

成瀬さんの作品には男の子や猫がよく出てくる。この男の子は大阪に住んでいた時の個展で案内状に描いていた。猫は、初めの頃は描いていなかったが絵を見た人たちに猫好きが多く、何気なく描き始めたからだ。



ミュージアムカフェバナナムーンにて

9条世界会議のキャラクターの制作や、教育出版の平成24年度中学生用、数学の教科書の表紙絵などを手がけてきた。「写真や文章がたまっているので編集して本を作りたい」と語った。

写真のような水彩画

牛越克巳さんが考案

牛越克巳さん(71)の絵は、スーパーリアリズムを追求した水彩画だ。まず鉛筆で精密な絵を描いてから、線が残らないようにして着色していく。まるで写真のような仕上がりがだ。

牛越さんは、5歳のころまで東京で育ち、両親の出身地である長野県に引っ越ししてきた。牛越



牛越克巳さん(71)



写真のように描かれた北アルプス。牛越さんは絵手紙も得意だ。

さんは、小学校6年生のころまで絵が嫌いで描いていた絵を捨てて授業で描いた絵を検

定に出すとそこで入賞した。それから学校の美術の先生を目指し、独学で絵を学ぶスーパーリアリズムに到達した。

その後先生になったが、作品にうまい下手はないのに、評価をつけなければならぬことに疑問を感じ、教職の道をあきらめた。

スーパーリアリズムの技法を生かし24歳の頃から、デザイナーとして働き、現在はボランティアで絵を教えるりしている。作品は、一枚仕上げるのに約1ヵ月かかる。その絵は、年に2回ほど、長野市や市民タイムスホールなどで開く個展で展示している。

牛越さんは、松川落語会「かせまんだら」の事務局長も務める。

野田さんにとって絵とは・・・

模索中！！



野田さんの自画像

野田真由美さん(60)は趣味で絵を描き続けている。生まれは名古屋。絵は主に静物画を描いている。絵を描くのに一番最初は、題材選びである。野田さんはこれが一番難しいという



「DOWN LIGHT」

真っ暗な部屋でライトの下長い影を作り出す物たちを描き、静かな世界を醸し出す作品

う。1枚目の絵の構成が決まると、描けたよなものだ。描くスピードは、気分によって変わり、1日中描いているときもあれば、1週間描かないこともある。野田さんにとって絵とは、「まだ模索中。結論はない」と語った。

りんご園の陶芸家

「やまもギャラリー」オーナー平林昇さん

西山地区のりんご園の中に、陶芸家平林昇さんの工房はある。「松川はいいところ。一度どこかで過ぐしてから戻ってくる」と、その

さがわかる」と語った。昇さんは学生時代に油絵を勉強。岡山県の備前で陶芸家をしていて松山祐母さんに憧れ、弟子入りした。その後

松山さんの下で勉強し、二十八歳で本格的に陶芸を始めた。弟子入りした当初は、松山さんのサポートをしていた。独立するまでに、3年以上かかったという。年に何度か作品展を開いている。個展や複

数人の陶芸家らと展覧会を開いたりもしている。息子が継がせず、自分の道を歩んでほしい」と語った。



作品の前で微笑む平林さん。「やまもギャラリー」では、BMWのwebコマercialの撮影も行われた。



自然と調和する昇さんの作品

